

『The Power of the Powerless』にみられる障害観

佐々木 翔大*・内田 優子*・広瀬 信雄**

I. はじめに

『The Power of the Powerless』は、雑誌リーダーズ・ダイジェスト誌に1970年7月号から連載された実話をもとにした小説である。作者クリストファー・デ・ヴィンク（Christopher de Vinck, 1951～）は、ベルギー人の血を引くアメリカ人である。高校の国語、国文学を担当する教師であり、重い障害のある自分の兄と暮らした生活を記した。やがてそれは、単行本としてまとめられ、出版された。本稿では、そのうちの第Ⅱ章において叙述されている内容を訳出する。

II. 『The Power of the Powerless』の概要

本稿で分析対象としたテキストは、1995年にグランド・ラピズで出版されたものを用いた。なお著者クリストファーの兄オリバー（Oliver de Vinck）は1947年に生まれ、1980年に亡くなっている。本書はⅠ章からⅩⅥ章までに分けられ、家族の話、兄オリバーのこと、子ども時代、青年時代、生まれ育った土地についてのこと、出版社とのやりとり、各方面から寄せられた作品や記事への反響、書簡などが綴られている。全体を通して、愛、宗教、教育、政治、そして障害と社会について語られ、私小説の形をとりながら、障害のある子どもとその家族の人生について、すなわち人間世界にとって永遠のテーマである障害のある人々の理解と処遇をめぐる考え方が示されている。

本稿で訳出した第Ⅱ章では、著者である弟から見た兄オリバーの存在について具体的に記され、自分にとって最も影響力のあった存在として描かれている。本書の中で核となる部分であると考えられる。

アメリカにおける障害児教育史では、ヘレン・ケラーとサリバン、ローラ・ブリッジマンとハウ、そして娘キャロルと母パール・バックが障害と社会との関連を論ずる際に登場してくる。本書でもヘレン・ケラーやパール・バックについては言及がなされており、障害のある人、その家族という視点からアメリカ社会の一側面を描いている作品としての価値を有している。

* 山梨大学教育人間科学部学校教育課程障害児教育コース

** 山梨大学教育人間科学部障害児教育講座（現：教育支援科学講座）

訳出については、筆者ら三人の訳文を照らし合わせ、意見を交わし、定訳とし、再度読み合わせを行った。なお訳文についての責任は、指導的立場にあった広瀬にある。

Ⅲ. 「Ⅱ章」全訳

1985年の冬、「リーダーズ・ダイジェスト誌¹⁾」のトム・ラシュニッツは、私をニューヨークのプレザントビルでの昼食に招待しました。そこでは、もう一人の編集者であるダイアナ・シュナイダーと会うことになっていました。

“私たちが興味をもつような記事のアイデアを1つ2つ提供してほしいのです、あなたに。”

このダイジェスト誌は、数か月前、私の記事を掲載してくれました。そのことが今回の招待に結びついたのです。私がビジネスランチに招かれたのは、はじめてのことでした。

“私は、ニューヨーク主教のジョン・オコナーについての記事を書きたいと思います。私は、古くからの家族の友人である写真家のネル・ドアについての作品も書くことができます。きっとあなた方は、私の良き友人であるフレッド・ロジャースかヘンリー・ノーウェンにも関心を持つかもしれないですね。他にも、私が教えている高校での国語についてや読書の重要性についても書くことができます。アメリカの詩の記事についてはどうですか？私が考える記事のアイデアで最後の切り札は、兄のオリバーについて書くことです。”

2人の編集者は、私を見つめながら、飲んで、食べて、聞いていました。それからトムは“オリバーについてももう少し教えてください。”と言いました。

“私が育ったのは、32年ものあいだベッドにあおむけで寝ている兄がいる家でした。同じ部屋の片隅で、同じ窓の下で、同じ黄色い壁のかたわらで。兄は目が見えず、話せず、脚はねじれていました。兄には自分の頭を持ち上げる力もありませんでしたし、何かを学ぶ知力も、持ちえていませんでした。”

絶望的な状態であった私の兄に、兄弟や姉妹が彼をくすぐったりおむつを替えたり食事の世話をしたりした激動の歳月を語る私の話を、この編集者は2時間、私の正面に座って聞いていました。私は、シェヘラザード²⁾のように言葉と記憶を手繰り寄せ、私と向かい合って座っている2人の良き人々に話をして聞かせたのです。

“その話こそ私たちがあなたに書いてほしい記事です。私たちは、オリバーについての話に一番興味を持ちました。”

その昼食はこうして終わりました。

こりゃ、すばらしいことになった、私は運転して帰る道すがらにそう思いました。その冬の夜毎、私はオリバーのベッドルームの色や咳払いの音を思い出しながら書き続けました。私は机に向かってヘレン・ケラー³⁾、パール・バック⁴⁾、ローレン・アイズリー⁵⁾、オリバーの洗礼の証明書について思い起こしました。母、父、兄や姉のことについても思い出がよみがえりました。

私は、高校で教えている間や子どものおむつを替えている間、妻と2人である時もオリ

バーのことを思い出し、書き続けました。

もう何年も前のことです、オリバーのハスキーな笑い声、私の母がおむつやシーツを芝生の上に干しているところにキリギリスが来たのを思い出しました。私は、降り注ぐ太陽、オリバーが息を引きとったときのこと、食事前の赤いボウルのことを思い出しながら書き続けました。

オリバーが亡くなってから5年経ちましたが、食べようとして木になっている果実がもぎ取られるようには、記憶が依然として消えてしまわないことに気がつきました。

1回、2回、3回、4回下書きして、たくさんの人々の人生や私の生き方を変えたエッセイがこれです。

私は、32年ものあいだ、ベッドにあおむけで寝ている兄がいる家で育ちました。同じ部屋の片隅で、同じ窓の下で、同じ黄色い壁のかたわらで。兄は目が見えず、話せず、脚はねじれていました。兄には自分の頭を持ち上げる力もありませんでしたし、何かを学ぶ力も、持ちえませんでした。

オリバーは生まれつき重度の脳障害を持っており、そのために彼の身体は無力の状態をよぎなくされたのでした。

現在、私は国語の教師をしています。授業で、ヘレン・ケラーの劇、つまり「奇跡の人⁶⁾」のことを話すときには、オリバーのことも学生に話をしてきました。

教師になった初めの年のある日、私は、オリバーが自分一人で食事を摂ることができないこと、これまで一度も話したことがないことなど、オリバーの反応がほとんどないことについて話しました。一番後ろに腰かけている少年は手を挙げて言いました。“デ・ヴィンク先生、彼は植物人間⁷⁾じゃないのですか。”

私は数秒言葉を失ってしまいました。私の家族と私は、オリバーに食事を与えています。おむつを替え、冬には地下室のワイヤーに彼の服とベッドシーツを干し、夏には芝生の上に服やシーツを広げて乾かし、白く清潔にしました。私は、いつも枕カバーの上をキリギリスが跳ねるのを見るのが好きでした。

私たちは、オリバーをお風呂に入れたり、彼を笑わせようとして胸をくすぐったりしました。時々、私たちは彼の部屋にラジオをかけたまま置いてきました。私たちは、彼の敏感な肌が日焼けしないように、朝、彼のベッドの上のシェードを下に降ろしました。私たちは、下の階でテレビを見ているときに彼の笑い声を聞きました。また、彼が腕を上下に揺り動かし、ベッドをキーキーと鳴らす音を聞きました。そして、夜中には彼が咳をするのを聞きました。

“私は、あなたがどうして彼を植物人間と呼んだのかを考えました。私は、彼のことを私の兄であるオリバーと呼んでいます。あなたたちも彼を愛してくれると思います。”

1946年、私の母は2人目の息子であるオリバーを妊娠していました。私の父はベッドから起き上がり、髭を剃り、服を着て仕事に行きました。駅で彼は何か忘れたと思い、家に戻りました。すると、石炭ストーブから漏れている有毒ガスのおおいに気がつきました。

私の母は、ベッドで意識を失っていました。私の上の兄は、ベビーベッドに寝ていました。ベビーベッドは高い所にあったので、そのガスは彼に影響を与えませんでした。父は、彼らを部屋から助け出し、玄関を抜けて外に出ました。そこで母は、すぐに意識を回復しました。そのときはそれで終わりました。

6か月後の1947年4月20日にオリバーは生まれました。健康でまるまる太り、元気な男の子でした。

“オリバーは他の赤ちゃんと同じように見えたのよ。”私の母と父は、何年か経って、姉と兄と私に言いました。彼らは深い愛情と喜びを持ってこの話を繰り返しました。“どこか具合の悪いと思わせる徴候は何もなかったのさ。”

彼が生まれて数か月後のある昼下がり、母は窓の方に彼を連れて行きました。母は、明るい太陽の下で彼を両腕に抱きかかえました。その時、オリバーは太陽を直接見続けたのです。それは、母がオリバーの目が見えないことに気づいた最初の瞬間でした。

この話の本当の主人公である私の両親は、オリバーが頭を支えたり這ったり歩いたり歌ったりすることができず、また何かを掴むこともできないことをごくわずかな歳月で知りました。それで、両親は彼の状態の程度を明らかにするたくさんの検査をするために、ニューヨークの Mt. Sinai 病院⁸⁾へ連れて行きました。

誰もが思った一つの原因は、母が妊娠3か月の時に吸い込んだそのガスでした。それは、オリバーに影響を与え、深刻な救いがたいどうしようもない状態にさせたのです。

長く感じた一週間後に、私の両親は病院へ行き、サミュエル・デ・ランジュ医師に会いに行きました。

私たちは、自分の子ども達が苦しんでいたら、その子を救おうとします。お腹が空いている時には、食べ物をあげます。寂しい時には、元気づけるものです。

“私たちは、息子のために何ができる？”私の両親はそれを知りたかったのです。デ・ランジュ先生は、母と父に、オリバーのためにできることは何もない、ということをはっきりさせてくれました。彼は、両親に期待を持たせようとしなかったのです。

“あなたたちは、オリバーを施設に入れたほうがいいですよ。”

“しかし”，私の両親は答えました。“オリバーは私たちの息子です。私たちはもちろん彼を家に連れて帰るつもりです。”

善良な医者と言いました。“それなら、オリバーを連れて帰って、彼を愛してあげてください。”それは、医学の診断のように聞こえました。

デ・ランジュ先生は、オリバーはおそらく7、8歳を過ぎては生きられないだろうと推測しました。彼はまた、その診断をはっきりさせるために別の神経外科医の所にオリバーを連れて行くことを勧めました。両親は同意しました。2人目の医者は、最初の診断を繰り返しました。オリバーの症例は、どうしようもないものであったのです。

2人目の医者は、オリバーの身体を調べるときに、両親が記入したものを見て、父と母の両方ともブリュッセル出身であることに気がつきました。その医者は言いました。“第

二次世界大戦の時、私の両親はユダヤ教徒のベルギー家族に保護され食事をもらっていました。今度は私がベルギーの家族を助ける番です。”そして、その医者は、検査費や治療費、薬のお金を一切両親に請求しなかったのです。

私は、2人の医者にお会いしたことはないのですが、私の全ての人生において、おとぎ話の英雄のように彼らを敬愛しています。

オリバーは、10歳に成長しました。彼は大きな胸と大きな頭でした。彼の手と足は、5歳児程には成長していて小さく柔らかいものでした。クリスマスには、彼のためのプレゼントとして、赤ちゃん用のシリアル⁹⁾の箱を包み、クリスマスツリーの下に置きました。7月の中旬の暑い時期には、おしぼりで彼の頭を拭きました。彼の洗礼の証明書は、彼の頭の上の壁に吊るしてあります。司教は、家に来て、彼に堅信礼¹⁰⁾を行いました。

オリバーは、今まで私が出会った中で最も絶望的で、今まで私が出会った中で最も弱い人間です。しかし、今まで私が出会った中で最も強い人間でもあります。

教師として私は、ささやかではありますが重要なことを伝え、生徒に何か影響を与えることができることを願って、授業の準備に何時間も費やしました。多くの本は、人々を行動に駆り立てたいという願いを込めて、毎年印刷されています。私たち教師は、子どもを育てたり価値観を教えたりする時、努力すれば自分のものになるということが生徒達に伝わるように期待しながら仕事をするのです。

オリバーは、息をすること、寝ること、食べること以外何もできませんでした。でも、他人の行動や愛、勇気、思いやりの源になることはできました。

私にとって、悲しいことを喜びに変えたこの家庭で育ったことは、なぜ自分がこういうタイプの夫、父、作家、教師になったのかをかなりの程度説明しています。

私が小さかった頃、母が私に言ったことを覚えています。“目が見えるということは素晴らしいことだと思わない？”そして彼女はある時こうも言いました。“あなたが天国へ行ったら、オリバーはあなたの方へ走ってきてあなたを抱きしめるでしょうね。そして、彼は最初に‘ありがとう’というかもしれないわね。”その母の話は、少年に大きな印象を残しました。

もちろん、私の方が、私にとっての「愛」、「我が家」、「我が家の庭」、姉や兄弟と一日中走り回った「我が家の森」を教えてくれたオリバーと両親に感謝しなければなりません。冬にはアイススケートをし、夏には亀を捕まえた広野、そしてオリバーが来る日も来る日も窓の下の綺麗なシーツの上で、いつも笑ったり寝ていたりしていたことを私は思い出します。

私の母は、最初は彼女自身にもわからなかったが、オリバーがいることによって私たちが守られ、恩恵を被っていることを説明していました。

私たちは、オリバーが重度であったので幸せでした。私たちが彼のためにしてあげられることは、1日に3度食事を与え、お風呂に入れ、寒くないようにすることくらいでした。私たちが1日中彼の部屋にいる必要はなかったのです。彼は一度も自分の状態がどうなっ

ているかを訴えませんでした。私たちは、彼の存在つまり本当の平和のあり様に感謝することができました。

しばしば、重い知的障害を持ち、しかも多動で自分本位で乱暴で、常時世話が必要な子どもに直面する親がいます。多くの親は、施設に子どもたちを預けること以外に選択肢はありませんでした。子どもたちの状況は様々です。誰も判断することはできません。

私たちは野原に生えている百合を世話するためにいるのではないかと信じるようになりました。そうすることは、私たちが彼にできる一番良いことであったのです。もし、あなたの家族にオリバーのような男の子や女の子がいたら、あなたは家族や彼女、彼にとって何が一番良いことであるのかが分かるでしょう。その結論に辿り着くまでは、決して平坦なものではありません。

私は父に尋ねました。“32年間、どんな思いでオリバーの世話をしたの？”“それは32年間ではなかったんだよ。”と父は答えました。“私は、ただ自分に‘今日オリバーに食事をあげることができるか？’と問うただけなんだ。そしてその答えはいつも‘できるさ’だったんだよ。”

私たちはその時その時をオリバーと一緒に過ごしました。

私は、かつて兄オリバーの傍に座っている幼い少年であった時のことを覚えています。私はひとりで家に居ました。そして、オリバーは本当に目が見えないのかどうか、その目が見せかけなのではないのかどうかということを知りたかったのです。だから、私は右手を彼の顔の上に広げ、彼の開いている目に近づけ、手を振りました。もちろん、彼は瞬きもせず、動きませんでした。彼の両目は私と同じで茶色ではありましたが、それは違うものでした。

しばしば、オリバーに夕食をあげることは私の仕事となりました。その夕食は、ゆで卵にシリアル、温かいミルク、砂糖を混ぜたものとバナナでした。「うわあ、ぼくならこんな食べないな」といつも思っていました。

生涯を通じてオリバーに食事を与えるということは、8か月の子どもに食事を与えているようなものでした。いつも彼の頭は、僅かに傾けられた枕に支えられていました。食事のスプーンは彼の唇まで持っていきました。彼はスプーンを感じ、口を開け、閉じ、飲み込みました。私は今でも、静かな彼の部屋で赤いボウルにスプーンが当たるカチカチという音を思い出します。

“デヴィンク先生、あなたはオリバーは植物人間だと言っているでしょ。”

私は、子どもだった頃、暗闇が怖く、兄たちと一緒にの部屋を使っていました。私たちの部屋は、オリバーの部屋と一枚の壁で仕切られ、12、13センチの木と壁土が夜の間私たちを分けていました。私たちはオリバーと同じ夜の空気を吸い、同じ風の音を聞いていたのです。私たちはそれを知ることはありませんでしたが、オリバーは、私たちの人生を左右する程の大きな力を私たちに引き起こしました。この世の中では、力がない人にこそ偉大な力があるということ以外に、オリバーの影響力を説明することはできません。弱者は、

強者を打ち砕くのです。

私は20代の前半に、ある女性に出会い、恋に落ちました。数か月後に私は、彼女を家族に合わせるために家に連れてきました。

紹介した後少し話をしていたら、母はキッチンを見るために出て行きました。その時、私は彼女に尋ねました。“オリバーを見に行くかい？”もちろん兄のことは話していました。

“いいえ”彼女は答えました。彼女は彼に会いたくなかったのです。まるで彼女から平手打ちをされたようでした。ただ私は当たり障りのない言葉を言って、ダイニングルームへ行きました。

すぐあとに、私はロイに出会いました。彼女は黒い髪に黒い瞳の美しい女性でした。彼女は私の兄や姉の名前を尋ねてきました。彼女は星の王子さまの本を私に持ってきてくれました。彼女は子どもが大好きでした。私は、彼女は素晴らしい人だと感じていました。

数か月後、私は彼女を家族に合わせるために家に連れてきました。家族に紹介をして、少し話をしました。私たちは夕食を食べ、そして、私がオリバーに食事を与える時間になりました。

私はキッチンへ行き、いつもの赤いボウル、卵、シリアル、ミルク、バナナを手に取り、オリバーの食事の準備をしました。そのときのことを私は覚えています。私は、恐る恐るロイに2階へ行きオリバーに会ってくれるかどうか聞きました。“もちろん”彼女は言いました。私たちは階段を上がって2階へ行きました。私はオリバーのベッドサイドに腰かけ、ロイは立って私の肩ごしにオリバーを見ていました。私は、彼に初めの1口目、2口目をあげました。“私にやらせてもらえるかしら？”彼女は尋ねてきました。“私にできるかしら？”彼女は自然に思いやりさえ感じさせるかのように尋ねてきたのです。そこで私は彼女にボウルを渡し、彼女はスプーン1杯の食事をオリバーにあげました。

これこそ、力なき者の力でしょう。あなたはどちらの女性と結婚したいと思いましたか？今日、ロイと私には3人の子供がいます。

注と補足

- 1) リーダーズ・ダイジェスト誌：アメリカの総合月刊誌。
- 2) シェヘラザード：「アラビアンナイト」に語り手として登場する王妃。
- 3) ヘレン・ケラー：1歳7か月で盲聾となったが、6歳のときサリバン女史に読み書きを習い、のち大学を卒業。身体障害者の福祉改善、社会の責任自覚を訴え、「三重苦の聖女」として尊敬を集めた。
- 4) パール・バック：アメリカの女性作家。長らく中国に居住し、中国を題材とした多くの作品を書く。代表作「大地」など。
- 5) ローレン・アイズリー：本書第VI章に登場する子ども。
- 6) 奇跡の人：三重苦の障害を克服したヘレン・ケラーと家庭教師アニー・サリバンを描いたウィリア

ム・ギブソンによる戯曲。

- 7) 植物人間：原文「a vegetable」。
- 8) Mt. Sinai：モーゼが神から十戒を与えられたという山。
- 9) シリアル：穀類を用いた朝食加工品。一般にはコーンフレークやオートミールをさしていることが多い。
- 10) 堅信礼：プロスタント諸教会で、幼児洗礼を受けた者が、自己の信仰告白をして教会の正会員となる儀式。